

大きくなったFAガール？

まさ (GPB)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

源内 あおの元に送られてきた三人のFAガールが大きくなった!?

pixivにも投稿しています。

目次

大きくなったF A ガール？

1

大きくなったFAガール？

ある日、うちにFAガールの轟雷がやってきた。他にも色んな所に轟雷が贈られたらしいけど、起動したのは私の所に来た轟雷だけらしい。

そしてその轟雷のデータが欲しいとかで、同じくFAガールのステイ子（ステイレット）とバーゼ（バーゼラルド）まで送られてきて、バトルする事になった。

初めは戸惑ったけど、バトルをするとバイト代が出るらしいし、今は何だかんだこの三人と一緒にいるのが楽しかったりする。

「あお、あお」

そんな最近できた可愛い同居人（？）の一人、轟雷の声には振り返る。

すると目の前に、轟雷が立っていた。

——私と同じ目線、同じ大きさで。

「……………」轟雷……だよな?」

「はい、私は轟雷です。忘れてしまったのですか?」

首を傾げる轟雷は可愛いなあ……ってそうじゃない!

「えっと、轟雷、何かおつきくなってる?」

轟雷——いやFAガールはそもそも、サイズは15cm程度だったはずだよな……。それが何故? 一体何が? って言うかこの状況が分かんないっ!

「何を言ってるのですか、あお。私はいつも通りですよ?」

混乱している私を余所に、轟雷は当然のように答える。

いつも通り!? 轟雷、昨日まで小っちゃかったよ!」

と、そこに――

「ちよつと！ まだなの!？」

「早く行こうよ〜!」

「……え？」

青いツインテールの女の子と、金髪サラサラの女の子が現れた！

この子達は誰!？」

「……って、ステイ子にバーゼ?」

「何、アンタ寝惚けてんの?」

「おつはよー！ あおは寝坊助だね〜」

「バーゼ、アンタが言うな」

びしっとバゼ子の頭にチョップをするステイ子。そしてバーゼがそれに対して「痛いよお〜」と返す。

間違いなく、この二人はステイ子とバーゼらしい。

……んだけど、

「二人もおつきくなってるのね……」

轟雷だけじゃなく、ステイ子とバーゼも手のひらサイズじゃなくなっていた。

「変な事言ってるでさっさと行くわよ!」

「……行くって、どこに?」

「あほっ子、アンタ自分でした約束も忘れたの?」

身に覚えのない約束の話されてる上に、ディスられたっ!？」

「今日はバーゼ達と一緒に、遊びに行くって約束してたよ〜?」

「あお、忘れてたのですか?」

待つて轟雷、そんなに真っ直ぐ見詰めながら悲しそうに言わないで

……!

「わ、忘れてないよ……?」

自分でも分かるぐらい声震えてるよお……。ステイ子はそのジト目止めてっ!」

「はあ、まあいいわ。さっさと行くわよ」

「あ、待ってよ〜」

そう言っつてステイ子とバーゼは外に行っちゃった。

「おお、私達も行きますよ」

「え、あ、うん」

……これ大丈夫なのかな？



「わあ、ウドラだあ〜」

「……………」

「こんなのどこが可愛いのよ……」

上からバーゼ、轟雷、ステイ子。

バーゼはウドラに抱き付いてはしゃいでる。轟雷も無言だけど、その表情はどこか嬉しそう。

それとステイ子ちゃん、こんなのかどどこが可愛いとか言ってるけど、触りたそうにしているのはバレバレだからね？

「ああ、写真撮って〜」

「あー、はいはい。ちよつと待つて」

私も触りたいし、一緒に写りたいんだけど。

……つていやいや、そうじゃないっ！

結局みんなと遊びに行くとかで付いて来ちゃったけど、これからどうすれば良いの？ とりあえず武希子に聞きに行けばいい？

「ああ、次は私と一緒に撮りましょうー！」

轟雷、何かキラキラしてるし随分テンション高いね……。

結局バーゼと轟雷にせがまれる形で、幾つか写真を撮った。もちろんステイ子もね。

最初は少し嫌そうにしていたのに、最後はノリノリな所とか可愛いんだよね。本人に言ったら顔真っ赤にしそうだけど。

「で、これからどうするの？」

「そうですね……二人はどうします？」

「バーゼお腹空いた！」

「そうね。そろそろいい時間だし、どこかでお昼ご飯にしましょ」

え？ お昼ご飯？

あれ、FAガールはご飯食べないんじゃないかなかったっけ……？

「ではそうしましょう。ああ、それでいいですか？」

「えっ？ あ、うん、そうしよっか」

って同意しちゃったけど大丈夫!？」

「じゃあ早く行こう！ バーゼ、お腹ぺこぺこだよお」

「分かったから騒がないの。ほんとアンタはいつつもそうやって――」

「今そう言うのバーゼ聞きたくない!」

「逃げるなあっ!」

ステイ子のお説教が始まった途端、バーゼが走って逃げた。

「ああ、私達も追いかけますよ」

迷子になられても困るし、走りたくないとか言ってられそうにもないかあ。

「しょうがない……二人とも待ってえー!!」

何とか二人に追いついた私達は、近くのファミレスで昼食を済ませて、駅前までやってきた。

みんな普通に食べてたけど、良いのかな？

「はあく、まんぞくまんぞく」

バーゼ、すっごい幸せそうな顔してるね。

「さ、エネルギーも補充できたことだし、腹ごなしするわよ」

「そうですね」

「よおーし、負けないからね!」

え？ 腹ごなし？ 何すんの？

「行くわよっ!」

ステイ子がそう叫んだ瞬間、三人の身体が光った。

「な、何なの!？」

光が収まって目を開けると、そこには完全武装した三人の姿があった。

ちよ、ちよつと待って!？ 腹ごなしってまさか、ここでバトルする

気!?

「準備できた?」

「問題ありません」

「おっけー!」

ま、待って――

「セツション!! 見てなさい!」

「GO!!」

「にやははっ!」

.....

「あお、あお」

「んん……あれ?」

……ここは……私の部屋?

「あお、おはようございます」

轟雷の音がする方に目を向けると、机の上に立ついつもの轟雷がいた。

「あれ、轟雷が小さくなってる……」

「小さく? いえ、いつも通りですが」

いつも通り……? あれ……?

「あお、どうかしたのですか?」

もしかして……?と思ひ、自分の頬を掴つかってみる。痛い。

「あー、やっぱりあれって夢だったんだ……」

「夢……? どんな夢を見ていたのですか?」

「えっと、三人が私と同じくらいに大きくなって一緒に遊びに行くんだけど、急に装甲アーマー付けてバトルするとか言い出しちゃう夢」

「あおと同じ……」

あ、これ言わない方が良かったかな……？ 大きくなるのは無理だし、まだ一緒に外に行った事もないし……。

「バーゼも遊びに行きたーい！」

「ダメよ、外は危ないんだから」

やってきたバーゼとステイ子も小さい。当たり前だけど。

「バーゼラルド、ステイレット。おはようございます」

「おっはよー！」

「おはよ」

バーゼも遊びに行きたいけど、外は危ないかあ……。

「私の目の届く所なら、良いんじゃない？」

確かに三人だけだと危ないかもしれないけど、私が近くにいれば大丈夫でしょ。

「確かにそうかもしれないけど……」

「じゃあ今週末、土曜日にでもみんなで遊びに行こっか」

「良いの!? やったー！」

「し、仕方ないわね」

仕方ないとか言っても、嬉しそうにしてるの分かるからね？

「あおと、皆と外に……」

「轟雷も楽しみ？」

「……はい。楽しみです」

「へへ、良かった」

轟雷も初めて会った時より笑顔が増えてきたね。いい感じいい感じ。

「あお、時間は良いのですか？」

「時間？ 一体何の……あつ！」

「ヤバイ！ 早くしないとまた遅刻する!!」

「締まらないわね」

「あはは、あおいつそげー！」